

「鯖江市の企業との交流会」が行われました

働く意義や社会貢献、目指す社会の実現に向けた課題を学ぶ

8月17日(月)、本校の探究科1年生を対象に、「鯖江市の企業との交流会」が実施されました。本校は2019年度に文部科学省から「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」に指定され(3年間)、鯖江市と鯖江商工会議所と相互連携協定を締結しています。今回は、鯖江商工会議所の方々にご協力いただき、鯖江市内の5つの企業との交流会を鯖江商工会議所にて開催しました。

●交流企業(五十音順)

(株) シャルマン (株) 白崎コーポレーション (株) フクオカラシ
(株) ポストクラブ (株) ヨシケイ福井

交流会では、SDGsを意識した活動、優れた技術、海外展開している企業にお勤めの方々から直にお話を伺うことで、働く意義や社会貢献、目指す社会の実現に向けた課題について学び、今後の探究活動の課題設定に活かしていきます。今回は、福井新聞社、福井テレビ、FBC、丹南ケーブルテレビの方々取材に来ていただきました。

交流

生徒は5つのグループに分かれ、1人2社と交流しました。事前の「探究」の授業で、交流する企業についてホームページ等で下調べを行いました。企業の方々から直にお話を伺うことで、仕事に対する熱意やこだわりを実感できたようでした。



レポート作成と発表

交流した企業のうち、1社のレポートを作成し、企業の方々の前で発表しました。生徒は少し緊張した様子でしたが、交流していない企業の発表も聞くことで、身近な所に日本や世界に誇る高い技術をもった企業が数多くあり、どの企業も人や社会のために仕事をしているということを感じ取ったようでした。



【生徒の感想より】

- ★シャルマンさんから「エクセレンスチタン」を開発するのに10年かかったと聞き、眼鏡フレームのようなあまり気にしない部分にも技術が詰まっていた、たくさんの人の失敗や努力があることを知った。
- ★白崎コーポレーションさんから環境に配慮した製品づくりを目指していると伺い、改めて自分の行動を振り返り、意味のある行動をしたいと感じた。
- ★フクオカラシさんの「1つのネジにも、たくさんの人の繋がりがあがる」という言葉がとても印象に残り、どんな仕事も誰かに支えられ、誰かの役に立っていると感じた。
- ★ポストクラブさんの眼鏡のデザインに対する熱意はとて強く、海外の人にも鯖江の眼鏡が誇れるように、目標や目的をもって仕事をしていることに感銘を受けた。
- ★ヨシケイ福井さんのお客様を第一に考え、どんな日でも食材を届けるという強い思いと、SDGsの取組みの一つである女性が働きやすい会社と地域づくりの思いが伝わってきた。

「ふるさと福井の未来を一緒に考えよう」

理想の福井県の将来像を目指し、自分にできることを考える

10月30日(金)、本校の探究科1年生を対象に、福井県出前講座を実施しました。未来戦略課より岩井さんと伊藤さんが来校され、福井県長期ビジョンについての話と理想の福井を実現していくためのワークショップをしてくださいました。探究科の生徒は、20年後の福井県がどうなると予想されているかを学ぶとともに、これから自分ができることは何かをグループで考える活動を行いました。



「福井県長期ビジョン」を知る

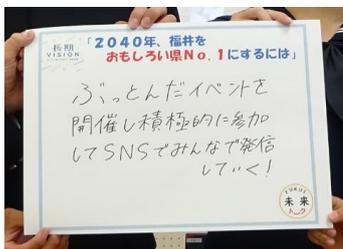
「20年後の福井県はどうなっていると思いますか？」

講座の前半は、20年後に福井県の人口はどうかという試算データを見て、人口減少の構造について学びました。また、医療の充実によって長寿化がさらに進むため、人生100年のライフデザインが必要であるということでした。そして、2040年に福井県が目指す姿をまとめた「福井県長期ビジョン」と、具体的な政策・施策について説明を聞きました。岩井さんの、「1000年を超える歴史と文化を誇りに思い、新幹線開通や技術の状況変化をどう生かしていくか。プロジェクトはすでに始まっているし、20年後30代になっている皆さんがどうしたいと考え、どう行動するかにかかっている」という言葉が印象的でした。

ワークショップ

講座の後半は、ワークショップを行いました。

一人一人が「福井県の課題」「理想の福井県」「自分ができること」を付箋に書き出し、グループで協力して意見をまとめ、模造紙に構造化して発表しました。グループ発表の中には「開発ばかりに目を向けず、今ある福井の良さを生かし継承していくことも重要だ」という意見が出ました。伊藤さんからは「福井県の課題を考えた時にだれにとっての課題かを意識することで、理想の福井県像や実現にむけての取組みも変わる」という助言をいただきました。今回の講座を受講して、今後課題研究テーマを設定する上で、大変重要な視点を得ることができました。



【生徒の感想より】

- ★福井県の実態や今取り組もうとしていることを知ることができました。自分が知らないところで福井がハイテクになっていたことや人口減少の深刻さを知り、とても勉強になった。
- ★福井は目立たない、地味、人口も減少している、そんなイメージをもっていました。けれど、今日の話聞いてガラッと変わりました。魅力ある県にしようと2040年に向けての大きな長期ビジョンを立て、新幹線開通をチャンスにさまざまなプランやイベントをたくさんの人が協力して行っていることに驚きました。
- ★これから自分たちが住みやすい県にしていけるために、今何ができるかを考えることができました。身近すぎて気づかなかったことに気づく、いい機会となりました。
- ★グループで考えた理想の福井の中に“自然”というキーワードがあったので、いつまでも環境のよい福井であるために、私はゴミ拾いなどのボランティアに参加していきたいと思いました。

「1 学年普通科 福井新聞社記者による特別授業」

伝えるための文章の書き方、インタビューの仕方を学ぶ



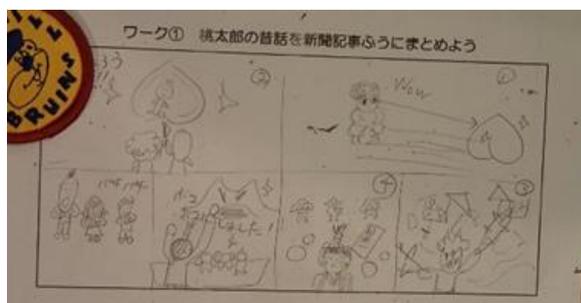
10月30日(金)、本校第一体育館にて普通科1年生約220名を対象に、「福井新聞社記者による特別授業」を実施しました。「総合的な探究の時間」では、今後新聞記事づくりに取り組む計画をたてており、今回は福井新聞社より、藪内弘昌氏と徳島康彦氏をお招きし、読者に伝えるための効果的な文章の書き方や、インタビューの方法を直接学びました。

授業の主な内容



特別授業は、説明とワークショップを織り交ぜながら展開されました。まず、その日の福井新聞が生徒全員に1部ずつ配付され、思いのままにめくることから始まりました。情報を得る手段としての新聞の信頼度やその使命に関する話があり、その後、手元にある新聞を使いながら、新聞の効率的な読み方の説明がありました。新聞記事は「結論→概要→詳細」という構造をしているという指摘をふまえ、記事の特徴を学んだ後、最初のワークショップ「桃太郎の昔話を新聞記事ふうにとまとめよう」に取り組みました。この活動のポイントは、5W1Hを意識して書くことです。すべての観点を確認することはできても、新聞記事ふうに見出し、リード(前文)をつけることになかなか苦労していたようでした。中にはマンガ風にとまとめようようなユニークな記事を作った生徒もいました。

次は、取材の際のポイントについて学びました。特に、5W1Hを具体的に聞き出す必要性について強調されていました。そして、2回目のワークショップ「突撃、隣の晩ご飯!」に挑戦しました。取材のポイントに基づきながら隣同士で3分間ずつ取材し合い、その取材メモをもとに10分間で記事を書きました。取材内容が身近なことなのでお互いに楽しそうに情報提供をしていましたが、制限時間内に記事を書きあげることは難しかったようです。ワークショップの途中で、講師の方から助言をいただきながら取り組んでいる様子が印象的でした。



生徒の感想

★新聞には様々な工夫がされていることに驚きました。自分で実際に記事作りをやってみると結構難しく、これを毎日やっている新聞編集の人たちはすごいと思いました。

★桃太郎の昔話を新聞記事のようにまとめるのは思っていたより難しかったです。ストーリーは知っているけれど、いざ新聞記事風にするとう全然書けませんでした。

★隣の人に昨日の夜ご飯について質問するときに、「5W1H」を意識して取材することができてよかったと思う。食べた感想やどんな状況で何をたべたのかに関してしっかりメモを取ることができた。相手に”Yes “,” No” だけで答えられるような質問を避けることができた。



「夢を育て未来を築く教室（ふるさと先生）」

地域課題のを見つけ方と鯖江市の活性化について

11月10日(火)、本校の探究科1年生を対象に、夢を育て未来を築く教室（ふるさと先生）を実施しました。伊藤忠商事株式会社の名誉理事である小林栄三先生（三方上中郡若狭町のご出身）に講師としてお越しいただき、「地域課題のを見つけ方と鯖江市の活性化について」というテーマで講演をしていただきました。

講演

はじめに、「今回の講演を新しい気付きの機会として欲しい」という小林先生の「ふるさと先生」への思いを聞かせていただきました。そして、100年前の人類が想像した100年後の未来が現代で実現しているものが多く、夢をもつことの大切さを教えていただきました。過去25年を振り返ると、今後25年も世界は物凄い速さで変化していくことが予想され、人口減少やシンギュラリティ（※1）など、現状と近未来に目を向け、様々なことに対して好奇心と問題意識をもつことが大切であると学びました。また、物事は一人では解決できないため、鯖江市をより良くしていくためには、地域や仲間と協働して知恵を出し合い、鯖江市の良さをもっとPRしていく必要があると教わりました。最後に、探究科の生徒に向けてエールをいただきました。



質疑応答



講演後の質疑応答では、探究科の生徒から小林先生に質問をさせていただきました。それぞれの質問に対する回答とあわせ、「自分の強みと情熱をもち、人間力を高めていく」「地域課題を見つけるためには、鯖江市の良い点と悪い点の両方に目を向け、能動的に行動する」「学ぶスキルを上げるためには、まずは人の話を素直に聞いて受け入れる」などの助言をいただき、これからの社会で求められることは何か、そのために何を学んでいくべきかを一人ひとりが考えを深めました。



生徒の感想

- ★何事も体、頭、心の健康を大切に、当たり前を当たり前になすことが大切だと分かりました。
- ★多様な価値観を理解することや、周囲の人々へ感謝するといった人間力を高めていきたいと思いました。
- ★鯖江市の活性化には能動的な対応が必要であり、長期的なプランを考えながら周囲と協働して取り組みたいと感じました。
- ★自分の強みを伸ばしながら、弱みは周囲と共に補っていきたいと思いました。
- ★成功の反対は「何もしないこと」という言葉が印象に残り、これからは失敗を恐れずに、色んなことに挑戦して経験を積んでいきたいです。



（※1）シンギュラリティ … 未来学上の概念であり、人工知能（AI）自身の「自己フィードバックで改良、高度化した技術や知能」が、「人類に代わって文明の進歩の主役」になる時点の事である。(Wikipedia)

1 学年探究科 大学教授による特別講義

課題研究における良い「問い」とは？ について学ぶ

11月20日(金)、探究科1年生を対象に、大学教授による特別講義を実施しました。仁愛大学の西出和彦教授に講師としてお越しいただき、2年次から取り組む課題研究を見据え、「課題研究における良い『問い』とは？」というテーマで講義をしていただきました。

そもそも研究とは？

はじめに、研究とは、「まだ誰も解いたことのない問いを立て、証拠を集め、論理を組み立てて、答えを示し、相手を説得させるプロセス」であるということ学びました。そして、誰も解いたことのない問いに挑戦するからこそ、「課題研究」は「調べ学習」とは異なるということでした。



良い「問い」とは？

4人グループに分かれ、「今、自分が知りたいこと」をできるだけたくさん疑問文で書き出し、それらが良い問いなのかを見極める活動を行いました。①「調べたら分かる問い」②「1年間で答えを出せない問い」③「1万円以内の資金で答えを出せない問い」④「実験方法や調べる方法が見いだせない問い」を除外していき、残った問いがもしかしたら課題研究の問いになるかもしれないというものでした。つまり、



課題研究における良い「問い」とは、

- ①「調べても答えが出ていない問い」 ②「1年間で答えが出せそうな問い」
③「お金がかからない問い」 ④「答えるための方法が見える問い」である

ということ学びました。研究と聞くと難しそうなイメージをもってしまいがちですが、意外と身近な所に問いは存在し、何事も興味をもつことが大切であると教わりました。

また、「C i N i i (サイニイ)」と「J-STAGE」を、先行研究を調べるツールとして紹介していただきました。自分が立てた「問い」について、「何が分かっている、何が分かっているのか」を把握するとともに、先行研究を批判的に読み解くことの大切さを教えていただきました。



生徒の感想

- ★グループの中でたくさんの問いが出ましたが、「調べても分からない」「1年間で答えが出せる」「1万円以内の資金で答えられる」「調べる方法が見いだせる」といった問いが良いということが分かりました。
- ★今まで課題研究とはどんなものなのか分からなかったのですが、今日の講義を聞いてイメージが湧きました。
- ★未知の問いについて研究できるということは、とても楽しそうだなと思いました。良い問いを見つけるために、何事にも「ホンマか？」と疑問をもって、今から考えていきたいです。
- ★この世には本当にたくさんの疑問があり、問いが無限に出てくると感じました。
- ★「まだ誰も解いたことのない問い」と聞くとなかなか思い浮かばないですが、身近な所に気を配ってみると、いろいろな問いが出てくると思いました。まずは、様々なことに興味をもって過ごしていきたいです。
- ★自分の興味のある分野の未知の問いについて、全力で答えを探究し、みんなを説得させていきたいです。
- ★これからの社会で求められる問題解決能力を、課題研究を通して鍛えていきたいと思いました。

2年生 SDGs 課題解決探る

令和2年11月20日(金)、2年生の総合的な探究の時間において、SDGsに関する研究成果を発表する授業が行われました。

コメンテーターとして鯖江市より齋藤邦彦氏、服部聡美氏、さばえSDGs推進センターより関本光浩氏、仲倉由紀氏、4名の方にお越しいただき指導・助言をいただきました。

世界の問題点を調査

各クラス5人前後のグループに分かれ、6、7月にはそれぞれのグループが世界で発生している問題点について調査しました。

教育や環境・貧困など、世界中の様々な現状を調べ、その中から各グループ一つの課題を選び、討論を重ね解決策を探ってきました。

途上国の飢餓問題について発表したグループは、日本にいても解決できる方法として募金やボランティア活動への参加、フードロスの削減を提案しました。

世界の医療格差について発表したグループは、途上国での医療人材育成の重要性を訴えました。

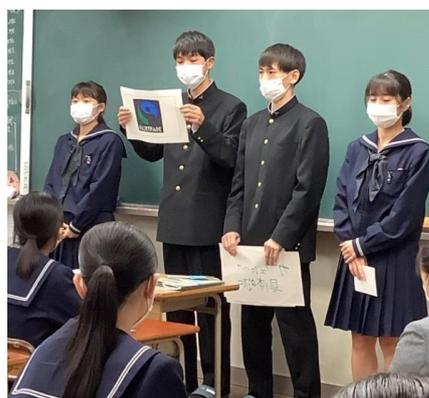
コメンテーターの先生方からは「勉強したことを周囲に広げ、自分でもやってみることが大事」など、多くのアドバイスをいただきました。

「電気をこまめに消す」「詰め替え可能なボトルやカップを使う」「身の回りで差別が起きたときには疑問を抱けるようにする」など、一人ひとりの日々の意識向上がSDGs17の

暮らしの中のSDGs

ゴールに向かっていくことを探究の授業時間以外でも心に強く残り、世界の未来は自分たちが変えていく！生徒の新たな決意が各クラスから溢れ出ていたようです。

各グループ研究成果を発表



生徒の感想より

SDGsについて調べなかったら、世界の現状を知ることはできなかった。さらに深く調べ、何か自分でもできたらいいと思えた。